

ホセア書8-11章 「不正を刈り取る民」

1A つむじ風を刈り取る民 8

1B 自分たちのための偶像 1-7

2B 諸国の中で喜ばれない器 8-14

2A 退けられる民 9

1B 汚される、汚した者 1-8

2B 多産を取り去られるエフライム 9-17

3A 二心の民 10

1B 取り去られる子牛 1-8

2B 踏みにじられるイスラエル 9-15

4A イスラエルを愛する主 11

1B 御腕に抱かれた方 1-7

2B 熱くなる心 8-12

本文

私たちの聖書通読の学びは、ホセア書7章まで来ました。主が4章から6章にかけて、イスラエルに対して、彼らが豊かになることによって偶像礼拝に走ってしまったことをお語りになっていました。そして7章から、アッシリヤによってイスラエルが襲われることを預言しています。8章から10章までも、そのような流れで預言が行なわれています。初めに、北イスラエルにある主の宮、といっても金の子牛が祭られている宮がありますが、そこをアッシリヤが襲って、子牛が取られていくという預言から始まります。

1A つむじ風を刈り取る民 8

1B 自分たちのための偶像 1-7

8:1 角笛を口に当てよ。鷲のように敵は主の宮を襲う。彼らがわたしの契約を破り、わたしのおしえにそむいたからだ。8:2 彼らは、わたしに向かって、「私の神よ。私たちイスラエルは、あなたを知っている。」と叫ぶが、8:3 イスラエルは善を拒んだ。敵は、彼らに追い迫っている。8:4 彼らは王を立てた。だが、わたしによってではない。彼らは首長を立てた。だが、わたしは知らなかった。彼らは銀と金で自分たちのために偶像を造った。彼らが断たれるために。

主が呼びかけられている角笛、そして鷲の形容であります。これはアッシリヤがイスラエルに対して襲撃する姿であります。「鷲」は、本来、荒野の旅をするイスラエルを守るための力ある神の姿として登場するのですが、主の守りの力の象徴が、今、彼らを破壊する力として使われているところは皮肉です。彼らがそれだけ主から背を向けたことを意味します。彼らが、神の側にいるのではなく、神に敵対する側にいるために、結果的に神が攻めるということになっています。同じような

ことを、パウロは異邦人社会の中に生きるキリスト者に警告しました。「コロサイ 3:5-6 地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。このようなことのために、神の怒りが下るのです。」

そして問題は、イスラエルが、自分たちが神を知っていると思っていたことです。しかし、そうではありませんでした。主なる神をあがめているとしながら、金の子牛を拝んでいました。私たちは、主よ、主よと御名を叫ぶ者たちが、主を知っているわけではないということを学んでいます。その生活に真実や誠実が表れていなければ、神を知っておらず、言葉では主と呼んでいますが、本当は主を知らないのです。それから、「イスラエルは善を拒んだ。」と言っていますね。神は良い方であり、神を拒むということは、自分たちの善を拒むということです。神から離れることによって、自分にとって、他者にとって、善なるものから離れていくことを意味しています。

それから北イスラエルの特徴は、祭司をレビ人ではなく一般の民から選びました。そして祭りも自分で勝手に考え出した、第八の月の十五日にしました(1列王 12:25-33)。そして王も首長も、勝手に選んでいき、主に伺いを立てることはなかったのです。つまり神本位の統治ではなく、人本位の統治だったのです。神ではなく人の思いが先行しています。当然ながら、神の臨在を感じる事ができません。神が共におられるという臨在がないところには、当然、目に見えるものの保障、安心感が欲しいのです。それで、銀や金で造った、目に見える偶像を拝んだのです。

8:5 サマリヤよ。わたしはあなたの子牛をはねつける。わたしはこれに向かって怒りを燃やす。彼らはいつになれば、罪のない者となれるのか。8:6 彼らはイスラエルの出。それは職人が造ったもの。それは神ではない。サマリヤの子牛は粉々に碎かれる。8:7 彼らは風を蒔いて、つむじ風を刈り取る。麦には穂が出ない。麦粉も作れない。たといできても、他国人がこれを食い尽くす。

北イスラエルの首都サマリヤは、アッシリヤによって紀元前 722 年に陥落しました。そしてイスラエルのベテルとダンに安置されていた金の子牛は、アッシリヤによって持ち去られました。当時の国は、相手国に戦争で勝つと、その相手国の神々を持ち去ることによって征服したことを誇示していました。かつて主は、カナン人の偶像を取り除きなさいと命じられましたが、皮肉にも、異教の国アッシリヤによって、イスラエルが拝んでいた偶像を取り除かれたのでした。

そこで、「風を蒔いて、つむじ風を刈り取る」という言葉があります。午前礼拝では、正義の種を植えて、それで誠実を刈り取りなさいという命令を読みましたが、ここには風という中身のないものによって、つむじ風という、風は強いだけで何もない虚しさを刈り取ると教えています。これから私たちはイスラエルが、自分のした不正をそのまま刈り取っていく姿を見ていきます。自分たちに、不公平な災いが降るのではありません。自分のした悪が、そのまま自分の身に降りかかるということです。ホセアの預言は、この部分に焦点が合わされてきます。

2B 諸国の中で喜ばれない器 8-14

8:8 イスラエルはのみこまれた。今、彼らは諸国の民の間であって、だれにも喜ばれない器のようだ。8:9 彼らは、ひとりぼっちの野ろばで、アッシリヤへ上って行った。エフライムは愛の贈り物をした。8:10 彼らが諸国の民の間で物を贈っても、今、わたしは彼らを寄せ集める。しばらくすれば、彼らは王や首長たちの重荷を負わなくなるであろう。

イスラエルは、自分たちが神に選り別れた聖なる民であることを拒みました。主なる神を王とする民また国がイスラエルです。しかし、サウルをイスラエル人が王として選んだ時の動機は、周りの国々のようにになりたいというものでした。それがここに、「諸国の民」のようになろうとしたことです。後にユダの国、アハズ王がアッシリヤに頼むようになりますが、その前に既にイスラエルの王はアッシリヤから益を得ようとしていました。「2列王 15:19 アッシリヤの王プルがこの国に来たとき、メナヘムは銀一千タラントをプルに与えた。それは、プルの援助によって、王国を強くするためであった。」とあります。けれども、それによってイスラエル人に重税を課し、自国民を苦しめました。そしてこのアッシリヤが、ヨルダン川東岸のイスラエルの住民を捕え移し、最後に首都サマリヤを包囲して、北イスラエル自体が崩壊します。主に呼び求めるのではなく、人間的な方法で問題を回避させようと思えばそれだけ、その問題が自分に近づいてきます。

それから、彼らを「だれにも喜ばれない器のよう」、「ひとりぼっちの野ろば」だと言っています。神のものとして選ばれた民が、世と同じようになれば、何にも役に立たない者になり、また孤独になります。神によって選ばれた民が、選ばれていないように歩めば、神からだけでなく、世からも見捨てられます。「マタイ 5:13 あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。」

8:11 エフライムは罪のために多くの祭壇を造ったが、これがかえって罪を犯すための祭壇となった。8:12 わたしが彼のために、多くのおしえを書いても、彼らはこれを他国人のもののようにみなす。8:13 彼らがわたしにいけにえをささげ、肉を食べても、主はこれを喜ばない。今、主は彼らの不義を覚え、その罪を罰せられる。彼らはエジプトに帰るであろう。8:14 イスラエルは自分の造り主を忘れて、多くの神殿を建て、ユダは城壁のある町々を増し加えた。しかし、わたしはその町々に火を放ち、その宮殿を焼き尽くす。

イスラエルは、罪が贖われるように祭壇を造っているのですが、それがそのまま偶像礼拝であったので、かえって罪を犯すようになっていたのです。私たちが異教の慣わしのことを考えれば分かるでしょう、悪霊祓いと称して、私たちにとってはまさに悪霊との交流のような儀式がありますから。しかし、ここで考えないといけないのは、「一生懸命になっているからといって、それが正しいわけではない」ということです。「ローマ 10:2 私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。」とありますね。しかし、ここにあるように「多くのおしえ」を聞いて初めて、つまり主の御言葉を知って初めて、それでまことの神へ祭壇を築

くことができます。

そして、象徴的に「エジプトに帰る」と言っています。アッシリヤに捕え移されたイスラエル人の中に、アッシリヤはエジプトまで攻めていきましたから、エジプトに連れて行かれた者たちが少しいるかもしれませんが、象徴的におそらくは書いているのでしょう。アッシリヤで奴隷となっているということが、エジプトで異国人として奴隷になっていたことと同じなのだ、ということです。イスラエルがイスラエルであるのは、エジプトでの奴隷状態から解放され、神のしもべの民となることでした。ところが、全くその初めの姿に戻されているということです。彼らは神の支配を受けたくない、その御言葉の教えを聞きたくないということで、他の世の人たちと同じようにやろうとしているのですが、その中で奴隷状態になっていったのです。神の奴隷にならなければ、罪の奴隷になるのです。

それからユダにも言及していますが、ユダの問題は祭壇を造ることもありましたが、エルサレムに神殿があるのでまだ守られていました。彼らの問題は、主に寄り頼まず「城壁」に頼っていたことです。主なる神ではなく、物理的な安全保障に抛り頼んでいました。

2A 退けられる民 9

1B 汚される、汚した者 1-8

9:1 イスラエルよ。国々の民のように喜び楽しむな。あなたは自分の神にそむいて姦淫をし、すべての麦打ち場で受ける姦淫の報酬を愛したからだ。9:2 麦打ち場も酒ぶねも彼らを養わない。新しいぶどう酒も欺く。

イスラエル人は、麦打ち場のような収穫の場において、カナン人の異教の慣わしに従っていました。収穫ということで、多産も願われて、そこで忌まわしい性的行為も儀式の中で同時に行われていたのです。霊的に姦淫を犯しているだけでなく、文字通りの性的な不品行も侵していました。主が、豊かにしておられそこに住むことができたのに、そのことを覚え、感謝しなかったのです。彼らが約束の地に入る時に、主はモーセによって前もって警告していました。「申命 8:11-14 気をつけなさい。私が、きょう、あなたに命じる主の命令と、主の定めと、主のおきてとを守らず、あなたの神、主を忘れることがないように。あなたが食べて満ち足り、りっぱな家を建てて住み、あなたの牛や羊の群れがふえ、金銀が増し、あなたの所有物がみな増し加わり、あなたの心が高ぶり、あなたの神、主を忘れる、そういうことがないように。」主によって恵みを受けたからこそ、主から離れて行ってしまいました。

9:3 彼らは主の地にとどまらず、エフライムはエジプトに帰り、アッシリヤで汚れた物を食べよう。

9:4 彼らは主にぶどう酒を注がず、彼らのいけにえで主を喜ばせない。彼らのパンは喪中のパンのようで、すべてこれを食べる者は汚れた者になる。彼らのパンは彼ら自身のためだけであって、主の宮に持ち込むことはできない。9:5 あなたがたは例祭の日、主の祭りの日には何をしようとするのか。9:6 見よ。彼らが破壊をのがれても、エジプトは彼らを集め、モフが彼らを葬る。彼らの宝

としている銀は、いくらさが勝ち取り、あざみが彼らの天幕に生える。

彼らが主を見捨てたので、彼らが主の地から引き離されます。アッシリヤで汚れた物を食べよう、というのは、ユダヤ人の食物規定のことです。全く度外視されている食物を彼らは食べなければいけなくなるということです。けれども、元を正せば彼ら自身が、主が命じられた方法ではない異なる方法でいけにえを捧げ、祭りを行なっていたのですから、その時から言わば汚れた物を食べていたのです。ですから、やはり「自分たちが行なっていたことが、そのまま自分たちに帰って来る」という、風を蒔けばつむじ風を刈り取るということが起こっているのです。

9:7 刑罰の日が来た。報復の日が来た。イスラエルは知るがよい。預言者は愚か者、霊の人は狂った者だ。これはあなたのひどい不義のため、ひどい憎しみのためである。9:8 エフライムの見張り人は、私の神とともにある。しかし、預言者は、すべての道にしかけるわなだ。彼の神の家には憎しみがある。

7 節の、「預言者は愚か者、霊の人は狂った者だ。」というのは鍵括弧を付けた方がいいですね、イスラエルの民がホセアのような預言者に叫んでいるのです。彼らに対して、主の言葉をまっすぐに語っているので、彼らはホセアのことを愚か者、狂った者だと叫んでいるのです。こうやって、彼らが預言者たちのことを憎んでいます。新約においても、ステパノがまっすぐに御言葉を語ったら、耳を塞いで騒ぎ出し、彼を石打にして殺してしまいました。こういった感情です。

2B 多産を取り去られるエフライム 9-17

9:9 彼らはギブアの日のように、真底まで墮落した。主は彼らの不義を覚え、その罪を罰する。

主はここから「ギブアの日」をしておられます。10章9節にも「ギブアの日々」と出てきます。これは士師記後半に出てくるイスラエルの中で起きた、忌まわしい事件です。エフライムのあるレビ人が、側めとしてユダのベツレヘムの女をめぐりました。でも彼女は彼を嫌って実家に帰ってしまいました。レビ人は彼女を引き取りに行きました。ベツレヘムからエフライムに戻る途中、夜を明かさなければいけません、彼はあえて当時エブス人のいたエルサレムを避けました。さらに北に行き、ベニヤミンの町ギブアに到着しました。そこで老人の家に泊めてもらいました。このように異邦人を避けて、仲間のイスラエル人の町に来たにも関わらず、とんでもない恥ずべきことが起こりました。ベニヤミン人のよこしまな者たちが、その男を知りたいと言ってその家を叩いたのです。そうです、あのソドムの町で起こったことと全く同じです。ソドムでは、中にいた御使い二人が、外にいる者たちに目潰しをくらわしましたが、ここでは実際に家の中にいる彼のそばめを家につかみ出して、夜通し陵辱したのです。

そしてそのレビ人が、家の敷居に手をかけている彼女を起こそうとしたところ彼女が死んでいるのを知りました。それで自分の家に戻って、彼女の死体を十二の部分にわけて、それをイスラエ

ルの各部族に送りました。イスラエルの人々は、「イスラエル人がエジプトの地から上ってきた今日まで、こんなことは起こったこともなければ、見たこともない。」と大きな衝撃を受けました。ところがベニヤミン人は、そのよこしまな者たちを引き渡すのではなく、かえって戦いをしかけてきたのです。それでイスラエル人はベニヤミンと戦争を行ない、ベニヤミン人がほとんど全滅しそうになったという事件です(士師記 19-20 章)。このように、イスラエル人が異邦人のレベル、いやそれ以下にまで墮落してしまったその象徴的事件として主は、「ギブアの日」と呼ばれています。

9:10 わたしはイスラエルを、荒野のぶどうのように見、あなたがたの先祖を、いちじくの木の新なりの実のように見ていた。ところが彼らはバアル・ペオルへ行き、恥ずべきものに身をゆだね、彼らの愛している者と同じように、彼ら自身、忌むべきものとなった。

「荒野のぶどう」また「いちじくの木の新なりの実」は、どちらも愛すべきもので、好ましいものです。ぶどうを育てるには大量の水が必要です。ですから荒野でぶどうが実ることは、本当に心を喜ばせます。そしていちじくの新なりの実は、とても甘くおいしいです。主がそのようにしてイスラエルを見ておられました。そして「エフライム」という言葉の意味は「実り多い」ですから、すぐに荒地になるあの地において、主が彼らに実りを与えておられました。また子もたくさん与えられ、豊かにさせたのです。

ところが、イスラエルが台無しにします。主は、「バアル・ペオル」の事件を挙げておられます。モアブの王バラクがバラムを雇って、宿営しているイスラエルを呪わせようとした。ところが、バラムは、イスラエルを祝福する美しい預言を行ないました。ところが、バラムは助言をしました。「我々はイスラエルを呪うことはできないが、彼らが自分の身に呪いを招かせることはできる。」と。モアブ人の娘たちがイスラエルの宿営に入っていくと、男たちが彼女たちと寝て、彼女たちが持ち込んだ神々を拝んだのです。それで神の罰が下りましたが、死んだ者は二万四千人もいました。これがバアル・ペオル事件です。彼らは多産の神ということで、性欲を刺激する神々を拝み、そして忌まわしいことを行っていたのです。

9:11 エフライムの栄光は鳥のように飛び去り、もう産むことも、みごもることも、はらむこともない。
9:12 たとい彼らが子を育てても、わたしはひとり残らずその子を失わせる。わたしが彼らを離れるとき、まことに、彼らにわざわいが来る。
9:13 わたしが見たエフライムは、牧場に植えられたツロのようであったが、今や、エフライムはその子らを、ほふり場に連れて行かなければならない。
9:14 主よ。彼らに与えてください。何をお与えになりますか。はらまない胎と、乳の出ない乳房とを彼らに与えてください。

主が子を増やしてくださいます、アブラハムに約束されたように、です。そしてエフライムはその栄光を持っていた部族でした。ところが、彼らが多産をもたらすまことの主を、偶像に置き換えたので、それで主がその働きをやめました。ツロとありますが、ここは同じく豊かさを表しています。こう

やってエフライムが子を産めなくなる、人口が減ることを教えています。

9:15 彼らのすべての悪はギルガルにある。わたしはその所で彼らを憎んだ。彼らの悪い行ないのために、彼らをわたしの宮から追い出し、重ねて彼らを愛さない。その首長たちはみな頑迷な者だ。9:16 エフライムは打たれ、その根は枯れて、実を結ばない。たとい彼らが子を産んでも、わたしはその胎の中のいとし子を殺す。9:17 私の神は彼らを退ける。それは、彼らが神に聞き従わなかったからだ。彼らは諸国の民のうちに、さすらい人となる。

ホセアは、預言の中で、イスラエルの歴史にとって由緒ある場を取って説明し続けていますが、ここでは「ギルガル」です。ギルガルは、ヨシュア率いるイスラエルがヨルダン川を渡り、そこで割礼を受けて、そしりを取られたことを記念したところです。けれども後に、そこでサウルがイスラエル王として任命を受けたところでもあります。神を押しつけて、人間が勝手に王を選んだところでもあります。そしてサウルは、アマレク人をその家畜も全て聖絶しなさいという命令に背いて、そこでいけにえを捧げたところでもあります。そこで既にサムエルは、預言を行なっていました。「1サムエル 15:22-23 主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。まことに、そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。」どんなにいけにえを捧げても、主の声に聴き従うことにはまさらない。そして、主の声に聞き従わないことは偶像礼拝になる、という指摘です。そして実際に、北イスラエルはそうなっていきました。そしてギルガルでは、偶像礼拝が事実、盛んにおこなわれていったのでしょ

う。主は、「追い出す」「さすらい人となる」という言葉を使われています。これは、創世記から来ている言葉です。カインがそうですね。「4:12 それで、あなたがその土地を耕しても、土地はもはや、あなたのためにその力を生じない。あなたは地上をさまよい歩くさすらい人となるのだ。」主の御心になれない者たちの姿です。カインの父母、アダムとエバも、エデンの園を追い出されました。そしてアブラハムの子イシュマエルとその母ハガルも、イサクをからかったことによって追い出され、荒のを彷徨いました。主の恵みに感謝せずに、無駄にしていくと、霊的にはさすらい人となっていきます。

3A 二心の民 10

1B 取り去られる子牛 1-8

10:1 イスラエルは多くの実を結ぶよく茂ったぶどうの木であった。多く実を結ぶにしたがって、それだけ祭壇をふやし、その地が豊かになるにしたがって、それだけ多くの美しい石の柱を立てた。10:2 彼らの心は二心だ。今、彼らはその刑罰を受けなければならない。主は彼らの祭壇をこわし、彼らの石の柱を砕かれる。

主が再び、イスラエルの民の皮肉を語られます。彼らが豊かになればなるほど、主をほめたたえ

るのではなく、むしろ石の柱、すなわち偶像礼拝に走って生きました。そして大事なものは、「二心だ」という指摘です。ここが、主の心について知っていく大事な箇所です。主は、私たちに対してただご自身だけに仕えてほしいと願っておられます。夫と妻の関係にご自身をなぞらえておられますが、一対一の関係であるからです。主が私たちにとっての夫であり、であるから他の神々には従ってほしくないのです。「イエス様に仕えているからいいでしょ。」という態度、後に付け足したように仕える姿、口では敬っていても、心は離れている姿。この時はイエス様、あの時は他のもの、という分れた心。これが二心であり、主が忌み嫌われます。ヤコブがこのことについて、次のように話しました。「4:4-5 貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。それとも、「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。」という聖書のことばが、無意味だと思うのですか。」主は妬むほどに、私たちを愛しておられます。

10:3 今、彼らは言う。「私たちには王がない。私たちが主を恐れなかったからだ。だが、王は私たちに何ができよう。」と。10:4 彼らはむだ口をきき、むなしい誓いを立てて契約を結ぶ。だから、さばきは畑のうねの毒草のように生いでる。

彼らは、神によって立てられた王でないと認めている言葉を言いながら、でも、王が自分たちに何をしてくれるのだろうか？と、うそぶいています。

10:5 サマリヤの住民は、ベテ・アベンの子牛のためにおののく。その民はこのために喪に服し、偶像に仕える祭司たちもこのために喪に服する。彼らは、その栄光のために悲しもう。栄光が子牛から去ったからだ。10:6 その子牛はアッシリヤに持ち去られ、大王への贈り物となる。エフライムは恥を受け取り、イスラエルは自分のはかりごとで恥を見る。10:7 サマリヤは滅びうせ、その王は水の面の木切れのようだ。10:8 イスラエルの罪であるアベンの高き所も滅ぼされ、いばらとあざみが、彼らの祭壇の上におい茂る。彼らは山々に向かって、「私たちをおおえ。」と言い、丘に向かって、「私たちの上に落ちかかれ。」と言おう。

ベテ・アベンは、ベテルのことです。そこで金の子牛がアッシリヤに持ち去られたことに対して嘆き悲しんでいる姿であります。自分たちが自尊心を持っていたもの、栄光を、取り去られました。そして、山々や丘に落ちかかれと叫ぶのは、そこにある主の怒りに耐え切れずにいる姿です。イザヤ2章にも出て来ますし、黙示録6章にて、天におられる小羊の怒りに耐えられない人々の姿があります。神の怒りを受けるということの恐ろしさが表現されています。

2B 踏みにじられるイスラエル 9-15

10:9 イスラエルよ。ギブアの日々よりこのかた、あなたは罪を犯してきた。彼らはそこで同じことを行なっている。戦いはギブアで、この不法な民を襲わないだろうか。10:10 わたしは彼らを懲らしめようと思う。彼らが二つの不義のために捕えられるとき、国々の民は集められて彼らを攻める。

主は再び、ギブアの日を取り上げておられます。そして、懲らしめを与えられますが、二つの不義とされています。これは神に対する不義と、人に対する不義でありましょう。それに対する報いを主が行なわれます。

10:11 エフライムは飼いなされた雌の子牛であって、麦打ち場で踏むことを好んでいた。わたしはその美しい首にくびきを掛けた。わたしはエフライムに乗り、ユダは耕し、ヤコブはまぐわをひく。
10:12 あなたがたは正義の種を蒔き、誠実の実を刈り入れよ。あなたがたは耕地を開拓せよ。今が、主を求める時だ。ついに、主は来て、正義をあなたがたに注がれる。10:13 あなたがたは悪を耕し、不正を刈り取り、偽りの実を食べていた。これはあなたが、自分の行ないや、多くの勇士に拠り頼んだからだ。

主は、エフライムを豊かにしておられました。「飼いなされた雌の子牛であって、麦打ち場で踏むことを好んでいた」と言われますが、主がイスラエルの地を豊かにされ、そこに住まわせていました。そのように、自分たちで労苦しなかった実を楽しむようにしておられました。それから、エフライムにおいても、ユダにおいても、イスラエルに軽くくびきをかけて、導き、支配しておられたのです。ですから、今、正義の種を蒔き、誠実の実を刈り入れよと呼びかけておられます。そうすれば、正義の雨が降ります。主を求めさえすれば、主がそのように再び飼ってくださるのです。しかし、彼らは悪を耕し、不正を刈り取っていました。そして偽りという実を結んでいました。そして大事なものは、「自分の行ないや、多くの勇士に拠り頼んだ」と言っています。これが落とし穴です。私たちは、信仰による歩みまでを自分の行ないや、外側にある力に頼ろうとします。

10:14 あなたの民の中では騒動が起こり、あなたの要塞はみな打ち滅ぼされる。シャレマンがベテ・アレベルを踏みにじったように。その戦いの日には、母親が、その子どもたちの上で八裂にされた。10:15 イスラエルの家よ。あなたがたの悪があまりにもひどいので、わたしはこのようにあなたがたにも行なう。イスラエルの王は夜明けに全く滅ぼされる。

「シャレマン」とは、北イスラエルを滅ぼしたアッシリヤ王「シャヌマヌエセル(2列王 17:3)」とされています。そして「ベテ・アレベル」とは、ガリラヤ湖南東にあるヨルダン北部の町、あるいはガリラヤ湖の北西にあるアルベル(Arbel)山ではないかと言われています。アッシリヤの王がガリラヤ地方を激しく攻め、母親が子供たちの上で八裂にするという、恐ろしいことをしました。

4A イスラエルを愛する主 11

こうやって、主はイスラエルに対して徹底的にアッシリヤによって滅ぼされることを警告されました。そして11章から、主がどれほどこの裁きをするについての激しい痛みが書かれています。これまでご自身が夫、イスラエルを妻として描いていたのですが、11章ではご自身を父、そしてイスラエルを子として描いていき、父にある子に対する愛をもってイスラエルをそれでも見捨てられないことを話していかれます。

1B 御腕に抱かれた方 1-7

11:1 イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した。

主がイスラエルを選ばれ、エジプトから脱出された時の心は、父が子を愛し、ご自分のもとに引き戻す時の心でありました。私たちが神の選びについて知らなければいけないのは、こうした父なる神の愛、一方的な憐れみであります。「2テサロニケ 2:13 主に愛されている兄弟たち。神は、御霊による聖めと、真理による信仰によって、あなたがたを、初めから救いにお選びになったからです。」主が私たちを愛するのに、私たちのほうで何か愛されるべきことを行なったから選ばれたのではなく、何も愛すべきものがないのに、それでも愛したという無条件のものなのです。父が子に対して抱く選びの愛であります。

そして神は、ご自分の愛される独り子であり、世を救うべく選ばれたキリストを、エジプトから出させるという経験をさせて、イスラエルのためのキリストとされました。マタイがヨセフが幼子イエスをヘロデの手から守るために、エジプトに下った時に、このホセアの預言の言葉が成就したことを話しています。

11:2 それなのに、彼らと呼ばば呼ぶほど、彼らはいよいよ遠ざかり、バアルたちにいけにえをささげ、刻んだ像に香をたいた。11:3 それでも、わたしはエフライムに歩くことを教え、彼らを腕に抱いた。しかし、彼らはわたしがいやしたのを知らなかった。11:4 わたしは、人間の綱、愛のきずなで彼らを引いた。わたしは彼らにとっては、そのあごのくつこをはずす者のようになり、優しくこれに食べさせてきた。

「彼らと呼ばば呼ぶほど、彼らはいよいよ遠ざかり」という矛盾、ホセア書の中で繰り返して来ます。主がこよなく愛されているのに、その愛に応答するのではなく、当たり前のように思っ、ますます自分自身を求める旅に出かけてしまいます。子が親の愛について、「うざったい」と思って反抗するのも似ているでしょう。主ご自身の無条件の愛についてのパラドックス、逆説です。こよなく愛されているがゆえに、その慈しみの限りを尽くして人に届かれるのですが、その愛を知らないで、その豊かさや祝福を自分の欲を満たすために台無しにしてしまうのです。教会の中でもそうであり、パウロが優しい父のような態度で接していたのですが、「2コリント 12:15 私があなたがたを愛すれば愛するほど、私はいよいよ愛されなくなるのでしょうか。」と言いました。

けれども、主の彼らに対する愛は尽きません。彼らに優しく接していかれます。出エジプト記の時に、エジプトを出た彼らに雲の柱、火の柱となっ、そして彼らが日々の生活を生きることができるようになって、守り導いておられましたが、彼ら自身は気づいていません。申命記に、「8:4 この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかった。」とあります。そして、「人間の綱、愛のきずなで彼らを引いた」というのは、人間のレベルにまで下りて来ることによって、その愛を示して、その愛によって彼らを引っ張ろうとしておられました。強制ではなく、あ

ごのくつこまで外すほどの優しさです。

11:5 彼はエジプトの地には帰らない。アッシリヤが彼の王となる。彼らがわたしに立ち返ることを拒んだからだ。11:6 剣は、その町々で荒れ狂い、そのかんぬきを絶ち滅ぼし、彼らのはかりごとを食い尽くす。11:7 わたしの民はわたしに対する背信からどうしても離れない。人々が上にいます方に彼を招いても、彼は、共にあがめようとはしない。

これまでエジプトに帰るという表現がありましたが、実際はアッシリヤであることが5節を見ることで分かります。象徴的に話していたのですが、ここではそのままを話しています。エジプトに帰るのではなく、アッシリヤの圧政の中で、エジプトの圧政と同じように生活するということです。そして、イスラエルは、主を呼び求めるという解決の道があったのに、そこには行かないで、あらゆる他の計画を立てます。主をあがめるように、いろいろな預言者から招かれたのですが、それをやろうとしていません。

2B 熱くなる心 8-12

11:8 エフライムよ。わたしはどうしてあなたを引き渡すことができようか。イスラエルよ。どうしてあなたを見捨てることができようか。どうしてわたしはあなたをアデマのように引き渡すことができようか。どうしてあなたをツェボイムのようにすることができようか。わたしの心はわたしのうちで沸き返り、わたしはあわれみで胸が熱くなっている。11:9 わたしは燃える怒りで罰しない。わたしは再びエフライムを滅ぼさない。わたしは神であって、人ではなく、あなたがたのうちにいる聖なる者であるからだ。わたしは怒りをもっては来ない。

これがホセアの預言における、神の感情の骨頂であります。ホセア自身が姦淫の女ゴメルを見捨てず、それでも彼女を探して、奴隷市場に売られているところを買い戻して、再び自分のものとしたのと同じように、主はイスラエルを見捨てることはできません。アデマとツィボイムは、ソドムとゴモラの近くにある死海の町です。申命記 29 章 22 節で、ソドムとゴモラと共に、硫黄と塩によって焼け土となったことが書かれています。主ご自身が、「わたしの心はわたしのうちで沸き返り、わたしはあわれみで胸が熱くなっている。」と言われます。このような愛で、キリストにあって神は私たちをも愛しておられます。私たちは十代の子が親の愛にうざったいと思って、その愛の深さをないがしろにするように、神の愛がここまで深いことを受け入れず、表面的な付き合いで構わないとして、それで反発します。神が愛するという態度は変わっていません、変わるのは私たちがどのように応答するかであります。私たちに足りないのは、神の命令を守ることのできない能力のなさではありません。自分がいかに、神の愛を知らないのかというところにあります。神の無条件の愛を知ったら、変わります。神の愛で、イエス様の命令に従いたいと願うようになります。

そして主は、ご自分の聖さを「滅ぼさない、怒りをもって来ない」ということで示されています。これは、モーセが荒野で怒りをもって岩を二度、杖で打ってしまった時に、主が「わたしをイスラエルの人々の前で聖なる者としなかった。(民数 20:12)」と言われているのと同じです。

11:10 彼らは主のあとについて来る。主は獅子のようにほえる。まことに、主がほえると、子らは西から震えながらやって来る。11:11 彼らは鳥のようにエジプトから、鳩のようにアッシリヤの地から、震えながらやって来る。わたしは、彼らを自分たちの家に住ませよう。…主の御告げ。…

主が戻ってこられます。獅子がほえるように戻ってこられます。天の果て、地の四方に散らされているイスラエル人たちが、主の再臨の時に集められます。「マタイ 24:31 人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。」西から、エジプトですから南から、そしてアッシリヤは北からやって来ます。特にエジプトとアッシリヤが言及されているのは、イザヤ書 19 章において、エジプトも主に立ち返り、アッシリヤも主に立ち返り、その間にあるイスラエルが第三のものとなり、そのイスラエルで、エジプトからもアッシリヤからも主をあがめるという預言があるからです。かつて、イスラエルを蹂躪していた二つの国が主に従うようになるのです。「震えながらやって来る」というのは、主の威厳と栄光に震えているということです。力強い神、反逆者をことごとく滅ぼす力を持っておられる方が、それでもイスラエルを贖っている時に、恐れおののきながらもそこにある恐ろしいほどの愛に応答している姿であります。私たちは、主に恐れおののきながら近づいているのでしょうか？

11:12 わたしは、エフライムの偽りと、イスラエルの家の欺きで、取り囲まれている。しかし、ユダはなおさまよっているが、神とともにあり、聖徒たちとともに堅く立てられる。

エフライムは偽りがあるけれども、ユダは神がともにいて、堅く立てられているというのはヒゼキヤのことを指しているのでしょうか。まだ主に拠り頼もうとしている姿です。私たちも、偽りに取り囲まれている状況と言えるでしょう。ユダと同じように、それでも神の側に留まっていようとしているのでしょうか？それとも、初めからエフライムと同じように偽りの宗教になってしまっている、神を礼拝する方法、動機が間違っているということでしょうか？